

第2章

各国の研究者による 調査結果の分析

- 金 美蘭 (1. ソウル)
劉 堅／付 宜紅 (2. 北京)
ペッカ・アリネン／ニナ・リーノネン (3. ヘルシンキ)
小松郁夫／館林保江 (4. ロンドン)
ヒュー・T・ソケット (5. ワシントンDC)



1. ソウルの調査結果の特徴に関する分析

金 美蘭（韓国教育開発院研究員）

（1）調査背景

韓国では、小学生の日常生活や学校生活に関する調査が多くなっている。近年、小学校段階での私教育費の支出、早期教育および早期留学の副作用が大きな社会問題になっているためである。英才教育を行う塾の選抜試験準備を目的とした課外^{*1}（塾や家庭教師など）を受けるといった現象まで起きている。人格形成の重要段階である小学生への加重な学習負担と競争主義が、さまざまな教育の問題や社会問題の背景になっているという批判も多い。そのため学級崩壊をはじめ、いじめ、校内外の暴力、不登校などの学校問題のみならず、青年失業、フリーターなどの社会問題に対応するため小学校段階から実態調査が行われているのである。韓国教育開発院では、2003年から小学校の学校教育実態を分析するための『学校教育実態及び意識調査』をパネル調査として設計して、3年ごとに調査している。韓国青少年政策研究院でも小学校4年生を対象に青少年の進路、逸脱、余暇などに関する実態と意識を調査する『青少年パネル調査』を2004年より実施している。最近では社会階層両極化（二極分化）による教育格差が社会的関心を集め、初期段階の教育格差の実態を明らかにするための調査も多くなっている。韓国教育開発院では2005年度に小学生（4年、5年、6年）の生活実態と意識、行

動などを分析するために『韓国における小学校の生活及び文化実態調査』を実施している。韓国教育課程評価院でも2002年から小学校3年生の『基礎学力診断評価』を実施し、基礎学力低下の原因を探っている。

しかし、国際比較の視点で設計された調査研究は少ない。学校システムや教育課程など韓国の特殊性を反映した調査設計が難しいからであろう。今回の「学習基本調査・国際6都市調査」でも韓国の「裁量活動」の位置づけが議論になった。「裁量活動」とは2001年から実施されている第7次教育課程により導入されたもので、「教科教育課程や特別活動のように計画的に意図された教育活動以外に、小学生の教育的要求を包容する広義の学習活動」と定義され、年間34週かけて週2時間の単位で行う総68時間の授業活動である。学校によって扱っている内容も異なり、科目名としない学校もあるが、重要な意味を持つため今回の調査では調査項目に入れた。また韓国においては1997年より小学校3年生から英語が必須科目になっている。調査対象である小学校5年生は、第7次教育課程により意思疎通のためのオーラル授業を中心に週2時間の英語授業を受けている。したがって、習い事の「外国語」の中には学校の授業の補習の意味で行っているケースも多く、その解釈には注意が必要である。

(2) 分析対象

今回のソウル調査はソウル市の小学校19校を対象に行われた。そこで収集された有効サンプル数は1,300名で男子50.8%、女子48.5%である（無回答・不明0.6%）。ソウルの場合には漢江^{ハンガン}の南の江南と北に位置する江北との生活格差が大きく、小学生の課外活動などの学校生活はもちろん成績も大きく異なるため、ソウルの25区を江南と江北に分けてサンプリングしたが、ここではソウルの小学生の学習実態の概観にとどめ、その詳しい分析は別の機会を借りることにする。

(3) 分析結果

① 学習活動

まず授業に関する項目をみると、ソウルの小学生は「体育」や「裁量活動」が好きで、「社会」や「英語」を苦手としていることがわかる。「体育」が好き（「とても好き」＋「まあ好き」の%、以下同）と答えた小学生の比率は87.9%、「裁量活動」の場合は79.1%にのぼるのに対して、「社会」が好きだと思う小学生の比率は41.7%にすぎない。小学校3年生から正規教育課程に含まれている「英語」の場合は、56.9%と他の教科に比べ低いほうである。体を動かす「体育」やクラブ活動と似ている「裁量活動」が好きで、暗記しなければならない知識学習の多い「社会」や「英語」が嫌いだというのは、育ちざかりの小学生からみれば当然かもしれない。

しかし、学校の授業をどのくらい理解しているかを問う授業理解度では、「英語」66.9%（「ほとんどわかっている」＋「だいたいわかっている」の%、以下同）、「社会」68.4%と、「好き」の比率より高くなっている。「好き」よりも「理解」のほうが高い数値を示していることから、ソウルの小学生の勉強は自己主導型ではないことがうかがえる。この傾向は国際教育到達度評価学会（IEA）の国際数学・理科教育動向調査にも表れており、「数

学」や「科学」の成績は卓越しているのに、「数学」や「科学」が「好き」だと答えた比率は日本とともに低いことから、「好き」と「理解」は必ずしも比例していないことがわかる。

授業へのかかわりからみると、「授業の内容が簡単すぎると思う」小学生が70.3%（「よくある」＋「時々ある」の%、以下同）にのぼっている。学習塾などの学校外教育による先行学習が一般化しているため、学校での授業内容が簡単すぎると思うのであろう。その反面、「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く^{*2}」（59.4%）のように、授業に積極的に参加している様子もうかがえる。また「テストで間違えとくやしいと思う」では東京より20ポイント以上低い。他の調査結果によれば、ソウルの小学生は試験結果や成績に対する成功や失敗の原因を生まれつきの能力あるいは運よりも、自分の努力として解釈する傾向が強い。テストで間違えたときにくやしい思いをあまりしないのは、ソウルの小学生の努力主義と一致する結果といえる。

② 学校外の学習活動

学校外での学習活動状況をみると、96.1%の小学生が「出された宿題をきちんとやっていく」（「あてはまる」＋「まああてはまる」の%、以下同）と答えている。「予習をしてから授業を受ける」「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」の比率もそれぞれ55.1%、60.6%と、半数以上の小学生が学校の授業の延長線で積極的に学習活動を行っていることがわかる。また、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」（85.1%）、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」（69.2%）など、ソウルの小学生は宿題のみならず予習、復習を通じて学校の勉強に励んでいるのである。学校の授業や宿題以外での活動に関するソウルの特徴として「日記をつける」小学生が74.4%（「よくする」＋「時々する」の%）と際立って高い。ただし日記は学校活動の一

環として行われているため、宿題として日記をつけているのにすぎない。日記は学校の教育課程の1つとして解釈したほうがよいだろう。

このような学校関係の学習活動以外に、小学生の代表的な学校外活動である課外活動について調べた。ソウルの小学生の72.9%が塾で授業を受けている。2003年の韓国教育開発院の調査の83.1%よりは低いものの、ソウルの小学生にとって塾で授業を受けるのは学校活動のようにふつうになっていることがわかる。学校外の教育を受けている小学生に「家庭教師」「集団課外」「学院(塾)」「学習誌」「インターネット課外」など活動の種類を聞いたところ、「学院(塾)」に通っていると答えた小学生が79.3%ともっとも多かった。また、塾に通っている日数もソウルでは週「5日」が47.3%ともっとも多く、「6日」や「7日(毎日)」をあわせると73.0%に達している。ソウルの小学生は月曜日から金曜日まで学校が終われば、学院(塾)に通う様子が示されている。

このことは勉強時間の異常な長さからも確認できる。小学生の学校や学校外の勉強状況を調べるため、具体的に勉強時間をたずねてみた。「あなたはふだん(月曜日～金曜日)、家に帰ってから1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間も含めてください」という質問に「3時間」以上と答えた比率が44.3%で、「おおよそ30分」以下は12.5%にすぎない。その長い学習時間の中で宿題に費やす時間は30分程度でわりと少ないのは、学校から小学生に出される宿題の量が基本的に少ないことが原因であろう。塾の宿題が多すぎるという理由で、学校ではあまり宿題を出さない状況までもが生じているのである。

また習い事の内容をみると、もっとも多いのは「外国語」(51.5%)である。その次は「スポーツ」(36.2%)、「音楽」(35.3%)が続いている。「外国語」が多いのは授業で行われている英語の補習のためであろう。小学校5年

生の英語教育は、日常生活で使用する基礎的な英語を理解、表現する能力を育てる教科として意思疎通の基本である言語技能教育、とくにオーラル教育が主になっている。最近では中国語がブームになって中国への早期留学も増えているので中国語も大きな比重を占めているが、基本的には学校での英語の成績を上げるためにネイティブの英語教師に英会話を習っている小学生が多いため、「外国語」の比率が多くなっているであろう。

ソウルの小学生の場合、塾や習い事などの課外活動が多く、異常に勉強時間が長いのは韓国の私教育実態をそのまま反映しているといえる。実際、小学生の学校外教育の経済規模は中学校や高校段階の私教育費を大きく上回っている。2003年の調査によれば、小学生の私教育費は7兆2千億ウォンと中学校の4兆ウォン、一般系高校の2兆ウォンよりもはるかに多い(チェ・サンゲン『私教育費の実態調査及び軽減対策研究』教育人的資源部、2003年)。このように学校外教育に多くの時間と金を費やすのは、何よりも学校の成績を上げるためである。習い事さえも「英語」「音楽」「体育」などの学校教科と関係している。韓国で実施されている全国水準の調査でも学校外教育を受ける理由として半数以上が「学校の成績を上げるため」と答えているのである(パク・ヒョジョン『韓国における小学生の生活及び文化実態調査』韓国教育開発院、2004年)。これら学校外教育(私教育)に関する志向が、本人の成績や父親の学歴によって異なるのもソウルの特徴である。つまり、成績上位、父親の学歴が大学卒であると学校外教育を受ける比率が高いのである。

ソウルの小学生は学習時間が長いのか、平日のテレビ視聴時間が短いのも特徴である。平日の平均学習時間が145.8分であるが、平日のテレビ平均視聴時間(101.0分)は東京(134.7分)より短い(p.31 図1-2-3、p.32 図1-2-4参照)。他方、ソウルの小学生は学校や塾通いなどで勉強する時間が多すぎるためか、体の調子が悪いと感じている比

率も多い。「目が疲れやすい」と感じている小学生の比率は85.5%（「とてもそう」＋「少しそう」の%、以下同）、「だるい^{*3}」と思う比率も67.3%と東京の小学生より多くなっているのである。

③学習上の悩み・意欲

学習上の悩みをたずねたところ、「わかりやすい授業にしてほしい」と思う小学生が67.2%と他の都市に比べて突出して高い。一方では「新しいことを知るのが好きだ」「問題が解けたり、何かがわかるとうれしい」と思うのはそれぞれ83.8%、93.2%と知的好奇心の高いことがうかがえる。知的好奇心は高いのに授業はそれを充足させるような方式で進められていないという不満がある。さらには「覚えなければいけないことが多すぎる」と思う小学生が51.7%と他の都市の小学生よりも多いことも確認できる。これらの小学生の学習上の悩みの背景には、ソウルの小学校の授業が知識暗記を中心としていて、学院（塾）での先行学習を前提に進められていることが考えられる。

成績に対する自己評価が高いのもソウルの特徴といえる。クラスの中での成績が7段階中、高い順の「1（上のほう）」「2」「3」であると答えた小学生の比率が49.4%と半分を占めている。また「がんばればとれると思う成績」でも7段階の中で「1（上のほう）」が47.4%と、「2」まで含めると75.7%にのぼる。韓国の小学校では「教育的配慮」のため順位をつけないので、自分の成績に関する客観的な評価ができない仕組みになっているのではないかと推測できる結果になっている。また、このように小学生の自己評価が高いもう1つの原因は入試の問題であろう。韓国においては中学校までは学区制によって地域の学校に入り、高校への入学も中学校と同様に特別な目的の高校以外には平準化によって学区制が適用されるため、受験競争は大学入試に集中している。このように中学校段階での選抜がないため小学生の成績の自己評価が高

く、努力すればいくらでもよい成績がとれると思っているのであろう。

④学習の効用

学校の勉強の効用についてたずねたところ、「一流の会社に入るために」（88.0%、「とても役に立つ」＋「まあ役に立つ」の%、以下同）、「会社や役所に入ってえらくなる（出世する）ために」（86.6%）、「お金持ちになるために」（72.1%）で、勉強が役に立つと思っている小学生の比率が高い。また「尊敬される人になるために」も88.9%にのぼっている。このような立身出世主義的な学歴観は、社会観にもそのまま反映されている。「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」と思うと答えた小学生の比率は95.3%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%、以下同）とほとんどの小学生が一流の会社に入り、一流の仕事につきたいと思っている。「お金がたくさんあると幸せになれる」と思う小学生も69.3%にのぼっている。また「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」と答えた小学生の比率も88.0%であることから、韓国の小学生は学校の勉強、つまり学歴の獲得を通じて一流の会社に入り、お金をたくさん稼ぐことで幸せになれると信じている様子うかがえる。そして、韓国は競争がはげしい社会であると認識し、競争に勝ち抜く方法として「努力」を重視していることがわかる。86.4%の小学生が、韓国は「競争がはげしい社会だ」と思っているのである。そして、韓国は「努力すればむくわれる社会だ」と思う小学生の比率も92.7%と非常に高いのである。

⑤学歴観・社会観

このような強い学歴信仰は成績観にも表れている。94.9%の小学生が「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい^{*4}」と思っている。また「今は勉強することが一番大切なことだ」と思う小学生の比率も71.2%である。「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」「どこかの高校や大学・短

期大学に入れる学力があればいい」と思う比率はそれぞれ19.7%、19.9%にすぎない。これらのことから、ソウルでは小学生のときから学校の勉強に励んでよい成績をとり、できるだけいい大学に入りたいと強く意識していることがわかる。「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい^{※5}」と思う70.6%の小学生にとって、ふつうに生活するのに困らないくらいの学力は、いい大学に入れるくらいの学力を意味するようである。このことは進学希望に対する質問を通じて確認できる。「あなたは将来、どの学校まで進みたいですか」という質問に32.1%の小学生が「四年制大学まで」と答えた。「大学院博士まで」を希望している小学生も21.2%にのぼり、「大学院修士まで」(9.0%)を含めると62.3%の小学生が四年制大学以上の学歴取得を望んでいる。韓国における大学進学率は82.1%^{※6}と、ほとんどの人が何らかの高等教育機関に進学している。しかし一方で、このような進学率の高さも影響して大学卒の失業率が高くなっている。そのため、さらに高い学歴を求めて大学院への進学率も高くなっているのが現状である。小学生の意識にも、このような韓国の実情がそのまま反映されているのである。

⑥メディアの利用

小学生のパソコン利用率が高い。学校授業の一環で「学校でパソコンを使う」比率は59.3%（「よくある」+「時々ある」の%、以下同）であるが、「家でパソコンを使う」比率は84.5%とより高くなる。インターネットの利用については、「学校でインターネットを使って何か調べる」は54.4%であり、「家でインターネットを使って何か調べる」小学生は87.9%にのぼる。このことから、ほとんどの小学生が家にインターネットが使えるパソコンを持っていることがわかる。「自分専用のパソコンを持っている」小学生も27.7%にのぼっている。インターネットの普及率で世界一を争う韓国の事情を反映している結果といえる。

学校でパソコンやインターネットを使う小学生が少ないのは、授業で使うパソコンの数には限界があり、インターネットの使用も制限があるからであろう。また韓国ではPCバンというインターネットカフェが町のいたるところにあり、小学生男子の半数以上がPCバンを利用していることとも関連していると思われる。

⑦家庭背景

ソウルの小学生の学習活動との関連で特徴的なのは、親の教育へのかかわりが強いことである。「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」比率は66.8%と他の都市の小学生に比べてもっとも高い。また「親は私にいい大学に行くことを期待している」と答えた比率も93.2%と東京(28.8%)の3倍を超えている。「親とよく話をする」(78.1%)、「この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある」(63.7%)は他の都市に比べて特別に高いわけではないが、お父さんやお母さんが成績をよく知っている比率はそれぞれ77.5%、90.5%と相対的に高い。このように親の教育期待が高く、毎日勉強しなさいという傾向は、親が大学を卒業している比率の高い成績上位の小学生に強く表れている。このことは韓国においては学歴取得競争が低年齢化、階層化されていることを意味している。実際、江南地域では小学生から大学入試を準備させているという。大学入試科目である「国語」「英語」「数学」はもちろん、論述科目が大学入試で重視されるようになってからは論述まで小学生のときから徹底して管理されている（キム・ウンシル『私教育1番地：テチドンママたちの入試戦略』ソウルイジブック、2005年）。階層や地域による教育投資の違いによって、学業成績に代表される学校での成功が左右され、これによって職業地位が配分される学歴主義競争が、親の教育熱の形をとって小学校段階から熾烈に繰り広げられていることが確認できるのである（ヒョン・ジュ『韓国の学父母の教育熱分析研究』

韓国教育開発院、2003年)。このような学校の成績への周りの期待と圧力が高まるなかで、学歴取得競争がますます低年齢化して小

学生段階からさまざまなストレスに苦しんでいる「受験地獄」の様子を垣間みることができるのである。

- ※1 韓国での「課外」は、学校外での学習機会をさしている。
- ※2 ソウルの調査票では「先生が説明したことの中で、大事なことは書いておく」。
- ※3 ソウルの調査票では「元気がでない」。
- ※4 ソウルの調査票では「できるなら、いい大学に入れるよう成績を上げたい」。
- ※5 ソウルの調査票では「将来生活するのに困らなければいい」。
- ※6 韓国教育人的資源部による（2006年度）。